

# ジェノサイドを可能にする思考

## ——ナチズムにおける論理の転換過程

渡 辺 将 尚

(文化システム専攻 欧米文化領域担当)

### 序

ヒトラーは、1925年刊の『我が闘争』第1巻においてすでに「東方植民地」の必要性について言及している。彼によれば、「ドイツでは毎年ほぼ90万人という割合で人口が増加して」<sup>1</sup>おり、近い将来かならず飢餓がやってくる。このまま何ら策を講じなければ、「いつか悲劇的な結末を迎えるにちがいない」<sup>2</sup>のだという。こうした重大な問題に対する彼の回答が、増え続けるドイツ人を植民させる「東方植民地」の獲得であった。1959年、イギリスの歴史学者トレバー＝ローパーは、ヒトラーは政権掌握後もこの目論見を捨てず、それが1939年に開始された戦争の重要な目的の1つとなったと指摘した。<sup>3</sup>

『我が闘争』の内容のみに着目すれば、トレバー＝ローパーの主張も、たしかに納得のいくもののように思われる。後にも触れる、1939年のポーランド侵攻後に置かれた「総督府」は、東部の地に植民してくるドイツ人と居住地域を明確に分けるために、ユダヤ人らを隔離しておく場であったし、1941年、不可侵条約を破ってソ連領内に侵攻したという事実も、まさに「東方植民地」を実現するためになされているように見える。しかし、その論法にまで注目した場合、トレバー＝ローパーの主張には明らかな違和感がある。ヒトラーの論法から分かるのは、戦争によって実際にドイツが

獲得したものが、『我が闘争』における「東方植民地」計画とかならずしも同一のものではない、つまり、戦時中に行われたことは、『我が闘争』以来の長年の夢を実行に移した結果ではないということである。

ヒトラーによれば、迫り来る飢餓を回避するためには、4つの選択肢を考えることが可能であったと言う。第一に、出産の制限。第二に、国土開発。第三に、新領土の獲得。第四に、商工業の活性化である。そのうち、第一と第二の選択肢は、短期的には成果を上げる可能性があるが、長期的な政策としては採用されるべきではない。なぜなら、種は自然淘汰によって強靱になるのであるから、同じことを人為的に行っても逆に種の弱体を招くだけであり、国土の生産性を上げても、限られた国土しかなければ、早晚限界が来ることは明らかだからである。したがって、残る選択肢は2つであるが、ドイツがより健全に発展していくためには、第三の道が執られるべきであると主張する。

つまり、「東方植民地」は、ドイツ人およびドイツという国が発展していくためのあくまで手段であり、さらにそこに至る複数の道のうち、消去法によって最善であると選ばれたものとして提示されているにすぎない。たしかに、他の可能性をすべて論駁した上で、自らの主張に説得力を持たせようとしたのだとも考えられる。しかし、「東方植民地」をめぐる彼の議論は一貫して慎重であり、大言壮語する他の箇所と比して、弱気にすら見える箇所もある。

たとえば、同じ文脈でヒトラーは、本国と地続きになっていない海外植民地にも言及している。現在、海外に植民地を保有している国は、それを

<sup>1</sup> Adolf Hitler: Mein Kampf. München (Franz Eher) Bd. 1. 1925. S.137.

<sup>2</sup> ibid.

<sup>3</sup> トレヴァー＝ローパーがこの主張を展開した「国際現代史学会」での講演内容については、堀内直哉：「トレヴァー・ローパーに見るヒトラーの戦争目的」〔目白大学人文学研究〕第9号、2013年〕に詳しい（ヒトラーの思考の首尾一貫性については、特に30頁を参照）。

維持するための莫大な負担に比して国自体の基盤は非常に小さく、よってそれらの国家はすべて脆弱なのだと言う。<sup>4</sup>彼によれば、そのような負担を負ってまで植民地が維持できるのは、イギリスとアメリカだけである。<sup>5</sup>こうした主張は——ヒトラー自身が直接言っているものではないが——米英ほど確固たる基盤を持っていないドイツのような国家は、海外植民地の野望を放棄しなければならないと言っているに等しい。

先述のように、『我が闘争』には「東方植民地」への言及があり、それが戦争の目的の1つであったことは事実である。しかし、上記のような点——すなわちその論法——を考慮すれば、『我が闘争』から東部占領地域での大量虐殺までを単純に1つの線で結びつけることはできないことが分かる。大量虐殺に至るには、ヒトラーおよびナチズムの中で、論理の転換ないしは飛躍が生じたと思われるのである。<sup>6</sup>

以下では、そうした論理転換がいつ、どのようなにして生じたのかを考察する。

<sup>4</sup>「今日、多くのヨーロッパ諸国は、ピラミッドを逆にした姿に等しい。その底面は、植民地、貿易などの負担に比してひどく小さい。」(Adolf Hitler: Mein Kampf. Bd. 1. S.146.)

<sup>5</sup> イギリスも国土自体は小さいが、言語的にも文化的にも共通のものを持つアメリカという存在がある分、ヨーロッパの他の国とは異なるのだと言う。

<sup>6</sup> 筆者は以前、第2次大戦という同時期に首相を務め、ともに自国の大国化を目指した2人の独裁者、ドイツのヒトラーとタイのピブーンを比較し、いかなる思考が大国化の野心へと発展していくのかを考察した(拙論:「無限に拡大する『民族性』——ヒトラーとピブーン、2人の独裁者の言説をめぐって」[「山形大学人文学部研究年報」第12号, 2015年, 53~65頁])。その結果、いずれの独裁者も「ドイツ人とは何か」「タイ人とは何か」を初めに定義することによって、どこまでを自国民として許容可能かという限界線を設定し、その境界内にいる住民たち——ナチズムの場合、ユダヤ人は初めから排除されているが——を取り込むことで大国化を目指すという共通点があることが明らかになった。

しかし、周知のようにナチズムは、戦争によって獲得した東部占領地域でこそ残虐性を発揮し、おびただしい数の人々を虐殺した。新たに獲得した地が、殺戮の場になったわけである。一方タイの場合、ナチズムのような大量虐殺を行うことはなかった。それどころか、ラオス・カンボジアなどの住民の入国税および入国手続きを免除し、結果彼らを同胞として扱うこととなった。こうした比較を通じて我々が気づくのは、領土拡大の野心だけでは残虐行為へとは至らないということである。

## 1

1939年9月1日のポーランド侵攻は、ドイツ人たちに対して、東方に関する新たな発見をもたらすこととなった。それが何かは、1940年2月29日、ヒムラーが大管区長官(Gauleiter)および党幹部たちを前に行った演説の中で明確に言及されている。

「東部の町や村を走ると、非常に奇妙なことに——少なくとも私にはそう思えるのだが——しばしばすばらしい顔立ちやすばらしい人間たちに出くわすのだ! 諸君もそこに行けば、金髪・碧眼で細面の人間を見出すであろう。金髪で背が高いのだ。彼は、憎しみのこもった目で我々を見つめる、狂信的なポーランド人だ。彼は、『お前は民族ドイツ人か』と聞かれても、『いや、私はポーランド人だ』と答えるだろう。」<sup>7</sup>

引用1行目において「奇妙」だと言われていることから、ヒムラーは、東方にはアーリアの血を引く人間はいないと思っていたことが分かる。しかし、外見的特徴から、口ではどんなに否定しようとも、彼らは間違いなく「我々の血」<sup>8</sup>を引いているのだと確信する。

では、彼らはどのような経緯をたどってポーランド化するに至ったのだろうか。ヒムラーによれば、もともと民族と民族の間には明確な線引きがなされていたが、ドイツ人が他の東方の民族を支配するようになって以後、両者の混血が生じた。自らに統治能力がないことを悟った民族によって、あえて支配者として招かれたことすらあったのだという。そのようにして、次々とドイツの血が流れ込み、ドイツの血を受け継いだ者たちは、さまざまな職業において目覚ましい活躍を見せる。しかし、やがてドイツの力が弱まってくると、ポー

<sup>7</sup> Heinrich Himmler. Geheimreden 1933 bis 1945 und andere Ansprachen. Hrsg. v. Bradley F. Smith und Agnes F. Peterson. Berlin (Propyläen) 1974. S.125.

<sup>8</sup> ibid.

ランド化が生じることになる。ドイツ語で教育を行う学校は禁止され、人々はポーランド語でしか読み書きができなくなる。現在のポーランド人はこのような過程を経て形成されてきたにも関わらず、かつてドイツ語を用いていたことすら忘れてしまっているのである。<sup>9</sup>

東方にアーリア人はいないというのはまったくの誤りであり、それどころか、東方の至る所にアーリア人がいることになるのである。

「今回のポーランドとの戦争のことを思い出してみよう。すさまじい抵抗を行う者があったとすれば、それはドイツ人だったのだ。ワルシャワの防衛に当たったロンメル将軍、ヘル防衛に当たった海軍提督ウンルー、モドリン要塞の防衛に当たったフランスのユグノーの出、つまり我々ゲルマンの血も流れている（also auch unser Blut, germanisches Blut）トメ将軍のことを考えてみるがよい。今すぐ名前は出てこないが、ヴィスワ川とブク川の間で18日以上もの間持ちこたえたあの将軍も、ドイツ系の名前だったと思う。」<sup>10</sup>

ここに登場するロンメルは、ポーランドの軍人で、ドイツ系ではあるが、北アフリカで活躍したエルヴィン・ロンメルとは別人である。また、ウンルーも同様に、ドイツ系ポーランド人である。ヘルは、ポーランド本土からバルト海に突き出した半島およびその先端部にある町の名で、この半島は、ドイツ軍の侵攻の際、ポーランド陸軍がもつとも頑強に抵抗した地として知られている。

<sup>9</sup> 全般にわたって事実の歪曲がはなはだしいが、ごく一部史実に基づいている部分もある。これが、ヒムラーに限らず、ナチ幹部たちの主張の危険さでもある。たとえば、1804年にオーストリア領となった現ウクライナのブロディでは、当初ドイツ語で教育が行われていたが、19世紀末財政難に陥り、ポーランドの支援を受けるようになると、ポーランド語で教育が行われるようになった。（Börries Kuzmany: Center and Periphery at the Austrian-Russian Border: The Galician Border Town of Brody in the Long Nineteenth Century. Austrian History Yearbook (University of Minnesota) vol.42. 2011. p.81.

<sup>10</sup> Heinrich Himmler. Geheimreden 1933 bis 1945 und andere Ansprachen. S.127.

最初に挙げられている2人は、明らかにドイツ系であるから、語られている内容自体ナンセンスだとしても、この時点ではまだヒムラーの中での論理は一貫している。しかし、問題は残りの2人である。引用文中のドイツ語を付した部分から明らかのように、ユグノーであるということは、同時にゲルマンの血が流れていることを意味する。新教に帰依し旧教から弾圧を受けたことをもって、すでにその人々はゲルマンの血を持っていると言ってよいというわけである。

最後の、18日間耐えた将軍の例は、さらに極端である。名を忘れたと言いながら、あれほどの忍耐を持ってドイツ軍に抵抗できた人物はドイツ人であると主張している。

後半の2人の例から明らかになるのは、「血」という言葉を再三用いつつも、実際に血統がどうかは問題ではなく、思想傾向や行動こそが重要だということである。ヒムラーの内部では、ゲルマンの血が流れているから優れているというのではなく、優れているならゲルマンの血が流れているはずだ、という方向に思考が動いているのである。そこではもはや、政権獲得後まもなく（1933年4月7日）発布された「職業官吏再建法」（Gesetz zur Wiederherstellung des Berufsbeamtentums）以来の人種に関する考え方は、完全に覆されている。当該法律では、「『宗教』ではなく『血統』『人種』『血』が決定的」<sup>11</sup>であり、「ユダヤ教信徒共同体に属していなくても『ユダヤ性』を問い追求できる」<sup>12</sup>とされていた。ユダヤ人は生まれた時点ですでに「ユダヤ性」を有しており、同様に、アーリア人は生まれた時点ですでにアーリア人と見なせるということであった。

だとすれば、「アーリア」も「ゲルマン」も、もはや実体ではなく、単なる概念に等しいものとなっていると言える。後に、ヒトラーは、東部占領地域で見出した金髪・碧眼の青年をドイツ本国

<sup>11</sup> 芝健介：『ホロコースト——ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』中公新書、2008年、34頁。

<sup>12</sup> 同上

で教育してドイツ人に仕立て上げようとするが、このこともまた、「アーリア」あるいは「ゲルマン」が、先天的から後天的、実体から概念に変化していたことを示している。

## 2

「アーリア」「ゲルマン」の指し示すものが変化しているなら、「ユダヤ」の意味するものも当然変化をこうむっているはずである。なぜなら、「ユダヤ」はいつも「アーリア」の対極にあるものを指しているからである。以上のことを確認するために、まずフランス降伏直後の1940年7月19日、ドイツ帝国議会で行ったヒトラーの演説から見ていくことにしよう。この演説の目的はイギリスに向けて和平の意思を表明することであるが、その前段階に当たる、ナチス政権のこれまでの成果を振り返り、イギリスの態度がいかに不当であったかを語る文脈において、「ユダヤ的」という言葉が散見される。

政権のこれまでの成果について、ヒトラーはつぎのように言う。

「国家社会主義の運動は、内政においては、ごく少数の金権民主主義的搾取者層があやつるユダヤ資本主義（jüdisch-kapitalistisch）の呪縛から解放されること、また外交においては、ヴェルサイユ体制の足枷から自由になることを表明してきた。…こうした見直しを何年もの間戦争なしで成し遂げたことは、これまた第三帝国の政権運営の成果の1つとして、我々皆が認識しているところである。」<sup>13</sup>

戦争なしで成し遂げられた成果とは、1935年の再軍備宣言、翌36年のラインラント進駐などを思い浮かべればよいであろう。ヒトラーによれば、こうした要求は本来英仏の強力な抵抗を招くはず

<sup>13</sup> Max Domarus: Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945. Wiesbaden (R. Löwit) Bd. II. Erster Halbband. 1973. S.1541. 傍点は引用者によるもの。以下の引用でも同じ。

であるが、<sup>14</sup>ドイツ側の努力によって平和裡に解決することができたのだという。しかし、戦争によって私腹を肥やそうとする諸勢力は、ドイツを戦争に引き込もうと画策し、ついに戦争せざるを得ない状況に追い込んだのである。

「血にまみれたユダヤ資本主義の戦争煽動者たちは、そのように平和的な見直しがうまく進んでしまうと、自分たちの狂気じみた計画を実行する格好の機会が失われてしまうと思ったのだ。…この諸民族にばらまかれた国際的ユダヤ的毒（das internationale jüdische Völkergift）は、あらゆる健全な理性を破壊しようとますます活発に動き始めているのだ。」<sup>15</sup>

ユダヤ人は、世界の経済システムを操り、各地の戦争をおおって金儲けをしようとしているというわけである。

この演説から11ヶ月後の1941年6月22日、ソ連に侵攻し独ソ戦が開始されたこの日（バルバロッサ作戦）、ヒトラーはドイツ国民に向けて声明を発表し、この軍事行動がいかに必要なものであったのかを説明する。ここでも「ユダヤ」という言葉が散見するが、その指示内容は先に見た演説とはまったく異なる。

「…しかし今や、ユダヤアンゲロサクソン（jüdisch-angelsächsisch）の戦争煽動者と、モスクワ本部にいるボルシェヴィキの同じくユダヤ人（jüdisch）権力者たちの陰謀に立ち向かうべき時が到来したのだ。」<sup>16</sup>

共産主義はユダヤ人がばらまいているものとい

<sup>14</sup> ラインラント進駐は、同地域を、ドイツ領でありながらドイツ軍が駐留できない地域であると定めたロカルノ条約（1925年）に反する行為であった。

<sup>15</sup> Max Domarus: Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945. Bd. II. Erster Halbband. S.1541.

<sup>16</sup> Max Domarus: Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945. Bd. II. Zweiter Halbband. Wiesbaden (R. Löwit) 1973. S.1731.

う主張は、ヒトラーの他の言説でも見られるものであるが、ここで興味深いのは、民主主義、資本主義、共産主義いずれも、ユダヤ人が行っている、あるいはユダヤ的なものであると述べられている点である。このように矛盾した用語法が可能となるのは、自らに敵対するものに、その都度その都度「ユダヤ的」との烙印を押していくからである。ここで言う「敵対するもの」とは、政治上対立する国家だけでなく、ナチズムとは相容れない思想も含む。つまり、「ユダヤ」は明確に何か特定のものを指すのではなく、「非ナチ」の総称である。だからこそ、敵対するものが変わるたびに、「ユダヤ」の指示内容も変化するのである。したがって、「ユダヤ」もまた概念である。

### 3

「ユダヤ」が実体から概念に変化したことによって、ユダヤ人政策も変貌をとげたのだろうか。また、そうだとしたら、それはどのような変化だったのか。以下では、こうしたユダヤ性の概念化を引き起こす、まさに契機となったと言える東欧地域——このことは、ヒムラーの演説を用いてすでに見ておいた。概念化は、彼らが東欧でアーリア人を発見したことからはまる——のケースを見ていくことにしよう。

東欧に侵攻していく中で新たに占領した地域におけるユダヤ人の連行は、地元の警察などの協力を得て行われていた。地の利がある彼らは、屋根裏や物置などに隠れているユダヤ人をも見つけ出し、ドイツ人に引き渡す役割を負っていた。<sup>17</sup>このような方法は、たしかに効率のよいものである一方で、別の見方をすれば、ユダヤ人の選別をドイツ人以外——すなわちそれは自動的に劣等民族を意味する——に任せてしまうことにもなる。あらかじめ、当該地域における反ユダヤ主義を煽つ

ておいたとはいえ、<sup>18</sup>他民族任せにすれば、本来連行されるべきでない人間が連行されたり、あるいは逆に、連行されるべき人間を取り逃がしたりする可能性に、たえず頭を悩ませなければならぬはずである。しかし、ポーランド警察に関して言えば、1939年末から1943年に至るまで継続的に人員が増強されている。<sup>19</sup>彼らの任務はドイツ人の補助であり、この事実は両者の協力関係が長きにわたって存続していたことの証左である。

このときすでに「ユダヤ」が概念化していたのであれば、上記のような共犯関係が存続したことも納得できる。なぜなら、「ユダヤ」の概念化によって、ユダヤ人かどうかの選別は、もはや血統という（彼らがそう信じる）客観的な手法に拠ることができず、服装や行動を含む外見上の特徴、あるいは思考傾向といったあいまいなものに頼らざるを得なくなるからである。このことは、東欧の子どもたちのドイツ化計画に関する山本秀行の報告から確認することができる。

「ヒムラーは、ドイツに歯向かうパルチザンの子どもたちも、ドイツ化しようとしている。有名な例は、リディツェ村の事例である。ベーメン・メーレン保護領総督代理に就任したラインハルト・ハイドリヒが、1942年5月プラハで襲撃され、6月4日に死去すると、ヒトラーは報復としてリディツェ村の破壊を命じた。村の15歳以上の男性は射殺され、女性はドイツにある強制収容所に送られ、子ども98人のうち、現場でドイツ化可能と判定された3人と1歳以下の7人をのぞく、88人がウッチにある収容所に送られた。このうち『再ドイツ

<sup>18</sup> 「独ソ戦前夜の1941年6月17日、帝国保安本部長官ラインハルト・ハイドリヒは、ドイツ軍に同行する4隊の特別行動隊の隊長に対し、口頭で、現地の共産主義者とユダヤ人の掃討を、ドイツ人の手によらず、現地住民による『自己浄化運動』として始動させるよう指示していた。」（野村真理：「1941年リーガのユダヤ人とラトヴィア人——ラトヴィア人のホロコースト協力をめぐって——」（前篇）」〔金沢大学経済論集〕第30巻、第1号、2009年、222頁。〕

<sup>19</sup> Klaus-Peter Friedrich: Collaboration in a “Land without a Quisling”. p.722.

<sup>17</sup> Klaus-Peter Friedrich: Collaboration in a “Land without a Quisling”: Patterns of Cooperation with the Nazi German Occupation Regime in Poland during World War II. Slavic Review (University of Illinois) vol. 64, no. 4. 2005. p.724.

化可能』と判定された7人は、その後、ドイツ風に改名して、養子にだされた。残りの81人は絶滅収容所で殺害されたといわれている。」<sup>20</sup>

重要なのは引用9行目である。詳細な審査・検査を経ずに外見のみで判断し、「現場でドイツ化可能と判定された」人々がいたのである。それは同時に、ドイツ化不可能——つまり、絶滅収容所での殺害——の判定も、その場で下されたということの意味する。

この例から明らかなように、この時すでに「ユダヤ」は概念化されており、概念化は殺害過程の簡略化をもたらすことになる。実際にユダヤ人であるかはどうでもよく、ユダヤ人らしいと判断されればそれで十分だからである。<sup>21</sup>

ポーランド侵攻時、ユダヤ人政策は、ある一定の計画に基づいて実行されていた。まず奪還できた西プロイセン<sup>22</sup>を、南北2つの「ガウ（「大管区」）」として帝国に併合し、それ以東のポーランドを「総督府」という形で、厳密にはドイツ領ではないが、実質的にドイツの管理下に入れた。新帝国領土には、ポーランド人だけでなく、ユダヤ人も多数居住していたが、純粋にドイツ人だけが住む土地にするために、非ドイツ人たちは「総督府」に強制移住させられた。たしかに、この計画（すなわち、特定地域のゲットー化）は最終的に

は頓挫することになるが、<sup>23</sup>ある一定時期まではユダヤ人をまず明確に区別するという思考が働いていたことを示している。つまり、初め厳密に行われていたユダヤ人を区別するという方策は、途中で放棄されたのである。ゲットー化の失敗——その背後には、もちろん対ソ戦のいきづまりが大きく影響している——といった実際的な問題が先にあり、それが「ユダヤ」の概念化をもたらしたのか、またその逆であるのか、それを見極めるのは難しい。しかし、一方がなければ他方もまた起こりえないこともまた事実である。戦局が悪化すればかならず他民族の大量虐殺に行き着くわけではないし、<sup>24</sup>「ユダヤ」が概念化したとしても、かならずそれが殺害に至るとは言えないのである。

\*

1941年10月14日、ついにドイツ帝国本土からも大量のユダヤ人移送が開始され、移送先への到着後すぐに、数千人におよぶ人々が射殺された。これを機に殲滅の対象は西ヨーロッパにも拡大され、1942年7月にはオランダ、同10月にはノルウェーのユダヤ人の東方移送が相次いで開始されていく。<sup>25</sup>

このユダヤ人狩りの西方への拡大にも、概念化が大きな役割を果たしている。この時期、イタリアの外相チャーノが、大本營のヒトラーを訪問しているが（1941年10月25日）、チャーノはその時語られたヒトラーの言葉を以下のように伝えてい

<sup>23</sup> 永峯は、「総督府」を統括するフランクが、「総督府」さえも早々にゲルマン化し、ユダヤ人を一掃するという企図を持っており、それが周辺地域との間でユダヤ人のいわば押し付け合いを引き起こし、最終的に東方におけるユダヤ人の大量虐殺につながっていった過程を詳細に描き出している。（永峯三千輝：「東ガリツィアにおけるホロコーストの展開」〔関東学院大学『経済系』〕第227集、2006年、60頁。〕

<sup>24</sup> 一般論としては、戦局が悪化した場合でも——あるいは悪化したからこそ——他民族を労働力や兵士として動員することは可能である。実際、ナチス政権も1941年9月の時点では、ユダヤ人の労働動員を行っていた。（永峯三千輝：前掲論文、60～61頁）

<sup>25</sup> Ronnie S. Landau: "The Nazi Holocaust." London (I.B. Tauris) 1992. pp.322-323. なお、この時点ですでにユダヤ人は、ドイツおよび同盟国から他国に出国することは禁止されている。(ibid.)

<sup>20</sup> 山本秀行：「ナチ人種主義再考——1942年9月16日のヒムラーの演説を読む——」〔「お茶の水史学」第54号、2011年、141～142頁。〕

<sup>21</sup> 先に、「ヒムラーの内部では、ゲルマンの血が流れているから優れているというのではなく、優れているならゲルマンの血が流れているはずだ、という方向に思考が動いている」と述べた。ここで、ユダヤ人に対しても同様の思考法が用いられていることが分かる。ユダヤ人だから劣っている（あるいはユダヤ的特徴を有している）のではなく、劣っている（あるいは、ユダヤ人に通じる特徴を有している）からユダヤ人であると断定するのである。

<sup>22</sup> 第1次大戦での敗戦によって、ポーランドに割譲させられていた。

る。

「今は(ナチ高官たちの間で)『ヨーロッパの連帯』という言葉がはやりのようだ。総統によれば、ヨーロッパは単に地理的な概念だけではなく、文化的・道徳的概念 (ein kultureller und sittlicher Begriff) でもあるのだと言う。ボルシェヴィズムとの戦争において初めて、(ヨーロッパ)大陸の連帯が示されたのだ——そんなことが、彼の側近たちからも繰り返し口にされた。」<sup>26</sup>

重要なのは、ドイツ語を付した部分である。ヨーロッパは概念である。そのような発言が、まさに西欧諸国からの移送が始まる時期に、はやり言葉のようにナチの高官たちの間で交わされていたのだという。たしかに、ヒトラーは以前から、演説等で「ヨーロッパ」という言葉を用いている。しかし、以下の引用に見るように、そこではまだヨーロッパは「地理的な概念」に過ぎない。

「今、我々の前には、戦争によって達すべきすばらしい目標が示されている。それは、新しいヨーロッパを作り出すことだ。このヨーロッパは公正さ (Gerechtigkeit) によって実現される。そうして皆にとって公正であれば、軍備すら不要なものとなる。武装解除が可能となるのだ。」<sup>27</sup>

この引用は、1940年1月30日、政権掌握7年を記念して行われたヒトラーの演説からのものである。彼によれば、今のヨーロッパは公正ではない。第1次大戦後、ヨーロッパは「国際連盟」などの試みを通じて、すべての国がともに繁栄できる平和な世界を目指したはずだった。しかしそこに働いていたのは、民族自決などとは裏腹の、ドイツを解体しようとする目論見であった。ヒトラーは

言う。

「そのようにして、民族自決など顧みられることもなく、ヨーロッパは切り刻まれ、引き裂かれ、大国 (große Staaten) は解体させられた。そして、初めは武装解除することによって、その後さらに分割することによって、国民 (Nationen) から権利を奪った。それが、(戦後長い時間を経過してもなお) この世界に勝者と敗者を残すこととなったのだ。」<sup>28</sup>

「大国」と「国民」はいずれも複数で用いられているが、内容からドイツのことを言っているのは明らかである。「武装解除」とは、最低限の軍備しか持つことを許されなかったこと、「分割」は、「ポーランド回廊」を指していると考えられる。ヒトラーによれば、ドイツをこのような過酷な境遇に置くことで、ヨーロッパ全体が経済的にも文化的にも停滞しているのだという。つまり、この演説での「ヨーロッパ」は、ドイツの損失をおおげさに言うために用いられているものであり、使用箇所によっては「ドイツ」の同義語ですらある（引用には「ヨーロッパは切り刻まれ」とあるが、切り刻まれたのはドイツである）。

したがって、「ヨーロッパ」がこれまでと異なる意味で使われ始めたとする先の引用でのチャーノの実感は正しい。

「ドイツ」「ユダヤ」に続いて、「ヨーロッパ」までも概念化したことが分かる。概念化とは実体から乖離することを意味するから、「ヨーロッパ」というただでさえあいまいな言葉が、さらにあいまいさを増したことになる。こうした思考の変化は、一見、ユダヤ人の虐殺の進行を止める方向に作用するようにも思われる。なぜなら、「ヨーロッパ」があいまい化すれば、その反対である「非ヨーロッパ」も、同時にあいまいなものになっていく

<sup>26</sup> Max Domarus: Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945. Band II. Zweiter Halbband. S.1769. ( )内は、引用者による補足。以下の引用でも同じ。

<sup>27</sup> Max Domarus: Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945. Band II. Erster Halbband. S.1453.

<sup>28</sup> ibid.

はずだからである。<sup>29</sup>「ヨーロッパ」も「非ヨーロッパ」も、あいまいになった中で、もはや特定のターゲットを標的にすることなど不可能になると考えることもできよう。

しかし、事態はそうはならなかった。以下において、「ヨーロッパ」の概念化がもたらしたものは何だったのか、見ていこう。

#### 4

ナチス政権はその初期から、IBMによるパンチ式の個人情報カードに目を付け、政策の立案に利用しようとしていた。パンチ式のカードとは、どの欄の何番目にパンチ穴があるかによって、その人物の特性・属性が分かり、さらに専用の機械にカードを投入し、集めたい特性を設定してソートをかければ、該当する人物をリストアップしてくれるというものである。当初、ドイツにあるIBMの子会社（Dehomag社）と協力しながら進められたのは、データの福祉分野での活用であった。<sup>30</sup>

しかし、単なる平和利用で済むはずはなかった。1939年5月、政府は大量の作業員を募集し、ドイツ帝国内すべての人民のデータ化に乗り出す。その際、血統に関する調査も行われ、すべての世帯主は一家の血筋について詳細に報告しなければならなかった。<sup>31</sup>

やがて、パンチ式カードは、すべての収容所において、収容者の把握のために使用されることになる。カードそのものの製造を請け負っていたのは、最大の収容所アウシュヴィッツであった。<sup>32</sup>このときから、「ユダヤ人たちの運命は、胸によく見えるように付けなければならない六角形の星によってではなく、ホレリスのパンチカード機によって穴が開けられ、ソートされる80の項目に

よって決定されることになった。」<sup>33</sup>

ここには人間観の変化とも言えることが起こっている。

概念化された「ドイツ」も「ユダヤ」も、その内部の多様性を無視し、民族によって類型化する思考である。すなわち、「ユダヤ人ならこうである」、あるいは「こうならばユダヤ人である」と結論づけてしまうことである。しかし、パンチ式カードは、そうした民族による類型化とは相容れない。カードにおいて「民族」は——たとえ最も重要であったとしても——数多くの項目の中の1つであり、同じユダヤ人であったとしても、その他職業・技能等の項目はそれぞれ全く異なる、という状況も多々生じうるからである。

この状況は偶然の産物ではない。明らかに意図的に作られたものである。つまり、ナチズムの中で、人間を民族として一律にはなく、それぞれに固有の特徴を持った集合体として捉える（あるいは、そう捉えた方が自らの利益になる）という人間観の変化があり、それが反映されたものである。ただし、その影響関係は逆——パンチカードを導入したことで、人間観の変化が起きた——ではない。なぜなら、収容者個別の特性を把握したいというのは、何よりも現場である収容所自身が望んでいたものであったからである。必要な場所に必要な力、能力を持った人間を互いに融通しようというのが、収容所幹部たちの意図であった。

しかし、前述のように、こうした変化もユダヤ人への残虐行為を緩和する方向へは向かわなかった。

収容者ごとに個別の特性を把握することが意味するのは、いわば人間の目録化である。その目録に多くの情報が盛り込まれれば盛り込まれるほど、それは現実の人間の姿をより詳細に写し取ったものとなる。実際、カードをソートすることによって、収容者の移送先を決めていたわけだから、カー

<sup>29</sup> 「ドイツ」の概念化に続いて、対極にある「ユダヤ」の概念化が起こったことは、すでに見ておいた。

<sup>30</sup> Edwin Black: IBM und der Holocaust. In: Der Spiegel 7/2001(12.02.2001). „Hollerith in der Hölle.“ S.48.

<sup>31</sup> ibid. S.48f.

<sup>32</sup> ibid. S.54.

<sup>33</sup> ibid. なお、ホレリスはパンチ式カードシステムの考案者。彼が1896年に設立した会社は、後に他社と合併してIBMとなった。



ドへの操作がそのまま現実の人間の処遇に結びついていたと言える。つまり、カードを管理できるということは、ユダヤ人をすべて手中に収めたことに等しい。

オランダ占領後<sup>34</sup>の1941年10月2日、アムステルダムを管轄する長官ベームカーは、ある手紙の中で以下のように述べている。

「指令6/41のおかげで、今や我々はオランダのすべてのユダヤ人を掌握することができた。」<sup>35</sup>

「指令6/41」とは、1941年1月に出された、オランダ国内に住むすべてのユダヤ人に申告を義務づけたものである。ユダヤ人の目録化は、彼らを労働力と見て有効活用するだけでなく、自分たちこそが彼らの運命を握る立場にあり、彼らを意のままにできるという思考に導くのである。

そこには、古い伝統を守り続ける東方ユダヤ人と、西欧に同化した西方ユダヤ人といった旧来の区分はもはや存在しない。占領した地域において大量虐殺が行われたことは事実であるが、侵攻と同時に虐殺が開始されたポーランド等東部地域とは異なり、オランダ等西欧では、占領後すぐに連行が開始されたわけではなかった。このことは、開戦以来ある時期までは西方・東方の区別が明らかに存在したことを示している。ナチの幹部たちの中での思考が変化したことともなっていて、ついにこの区別も消滅するに至ったのである。

\*

『我が闘争』にはすでに「東方植民地」への言及がある。しかし、その構想と、実際に行った結果の間には大きな乖離がある。『我が闘争』における「東方植民地」が、増加の一途をたどる（と彼が主張する）ドイツ民族を移住させるための地であった一方、戦時中当該地域は、もっとも激烈

な殺戮の場となった。

本稿では、直線的に結びつくことのない、ドイツ人の移住からユダヤ人の殺害へ至る過程には種々の論理転換があるとの前提のもと、その変化の一端を追った。その結果、明らかになったことは、民族に対する狂信というよりはむしろ、民族が実体から概念へとあいまい化し、最終的には消滅することによって、大量虐殺へと至るということであった。概念となった「ドイツ」「ユダヤ」は「ヨーロッパ」に取って代わられ、さらには当時の最新の技術に支えられた人間のデータ化によって、その意味さえ失うこととなったのである。

たしかに、本稿で引用した永峯らの研究が指摘するように、戦局の悪化がユダヤ人政策にもたらした影響も大きい。しかし、それを下支えした論理の転換もまた、見過ごされてはならないのである。

<sup>34</sup> わずか5日間の攻撃の後、オランダがドイツに降伏したのは、1940年5月15日のことである。

<sup>35</sup> *ibid.* なお、「掌握する」に対応するドイツ語には „in der Tasche haben“ が用いられている。

## Der Nazismus, als Prozess der gedanklichen Perspektivänderungen betrachtet

WATANABE Masanao

(European & American Cultures, Cultural Systems Course)

In „Mein Kampf“ betont Hitler schon die Notwendigkeit der Ostkolonien, um der stetig steigenden deutschen Bevölkerung neuen „Lebensraum im Osten“ zu verschaffen. Aus verschiedenen Dokumenten folgerte 1959 der englische Historiker Trevor-Roper, dass Hitler auch später in der Kriegszeit diese Ansichten nicht geändert habe und diese wichtige Motive zur Kriegsführung und zum Genozid beinhaltet haben.

Wenn man jedoch nicht nur den Inhalt der Behauptungen Hitlers, sondern auch seine Erzählweise berücksichtigt, erklärt sich diese Deutung zwar als nicht falsch, aber auch nicht als ganz richtig. Er zeigt die Notwendigkeit der Ostkolonien als eine der vier Möglichkeiten, um Deutschland aus der Hungersnot zu retten. Vom Plan der Ostkolonien über den Krieg bis hin zum Genozid gibt es mehrere Gedankensprünge.

In der vorliegenden Arbeit wird untersucht, wann und welche Gedankenänderungen geschehen seien und zum Genozid geführt hätten.

Zum Genozid gibt es vier Stufen:

1. Undeutlichwerden der Definitionen zum Deutschtum
2. Undeutlichwerden der Definitionen zum Judentum
3. Undeutlichwerden der Definitionen zu Europa
4. Änderungen des Menschenbildes

Nun könnte man annehmen, dass das Undeutlichwerden dieser Definitionen die Prozesse der Ermordungen verhindern könnte. Jedoch war das Gegenteil der Fall. Es erleichterte diese ungemein: Ohne genaue und eindeutige Definitionen kann man auf undeutliche, willkürliche Kriterien stützen. Vor dem Krieg hatte man wie in den Nürnberger Gesetzen mit den deutlichen (natürlich nur für die Nazis deutlich) Kriterien geurteilt.

Die Änderungen im Menschenbild ist der letzte und meines Erachtens der wichtigste Sprung, der zum Genozid führt. Zu Beginn des Krieges wurden Lochkarten von einer IBM-Tochtergesellschaft eingeführt, um die Daten der Häftlinge in den KZ zu verwalten. Das anfängliche Ziel dieser Karten war es, Häftlinge, die unterschiedliche Fähigkeiten hatten, zur ihnen geeigneten Arbeit auszunutzen. Das bedeutet, dass die Nazis Häftlinge (hauptsächlich Juden) nicht als das ganze Volk, sondern als einzelne Personen zu betrachten begannen. Aber auch diese veränderte Betrachtungsweise wirkte nicht positiv. Es ist bald in den Hintergrund gerückt, und ein neuer Gedanke ist hervorgetreten: Am 2. Oktober 1941 schrieb der NS-Stadtkommissar von Amsterdam, dass sie jetzt alle niederländischen Juden in der Tasche hätten.

Man denkt, extrem völkische Gedanken führten zum Genozid. Das Gegenteil: Der Genozid wurde verursacht, indem man völkische Begriffe undeutlicher machte.